

横 櫛

—横櫛の分類と生産遺跡—

辻 裕司

1. はじめに

筆者は京都市域出土の平安時代に属する木製品の概要を示したが、各木製品についての変遷過程を明らかにするまでには至っていないため、手懸りとして服飾具の一つ、扇についてまとめたことがある（資料1）。他の服飾具についても概観する過程で幾つかの新たな資料が得られたことから、今回「櫛」について各都城から出土した櫛を含めてまとめたいと考えた。また、その過程でいわゆる製品としては認識しがたい遺物が含まれていることが判明し、櫛の未製品ではないかとの予見を得たことから、この櫛が出土した平安京右京八条二坊二町の平安京西市周辺地域における実態や平安京における位置づけなどについても明らかにすることに努めた。

2. 横櫛の分類の概要

櫛には横櫛と豎櫛があるが、ここでは横櫛を対象とする。櫛の型式や部位の用語については、原則として『木器集成図録』（資料2 以下、図録という）による。以下、「櫛」の項を挙げると、「ツゲないしはイスノキの板片の側縁から細い歯を挽きだし、表面を平滑に研きあげた横櫛が一般的で、各地での出土例も少なくない。多くは断片であり完形のもの少ない。7世紀～10世紀ごろの横櫛は長方形のものA型式と半円形のものB型式に大別でき、A型式は肩部が角張るAⅠ型式と、肩部に丸味をもたすAⅡ型式にわけることができる。B型式の発見例は少なく完形品をみないが、概して精製品であり、背の断面が柳葉形を呈している。7世紀にはAⅡ型式の横櫛はまだ出現しておらず、歯も概して粗く、3cmあたり21～24枚を挽きだす。8世紀以降になると、歯が細くなり、平城宮6ABO区SE311A・SE311B・SE282から出土した良好な資料34点では、3cmあたり平均歯数は32枚であり、もっとも細かいもので38枚になっている。歯の挽きだし位置をきめる切り通し線は、背の上縁に平行して曲線を描くものと上縁に関係なく直線にひくものがある」とされ、櫛の平面形と肩部の形態を主たる分類の根拠を提示されている。ところが、横櫛の分類の過程で細部の形態差から幾つか細分できる可能性が想定されたことから、『図録』に基づいた基本形である大分類【A型式（AⅠ・AⅡ型式）】・【B型式】について補足的な分類記号を新たに付している。

なお、平安京跡における櫛の出土例が最も多い遺跡として、平安京右京八条二坊二町が挙げられる。この遺跡からは、以下に示す複数の型式の櫛がみられ、平安時代前期の平安京の櫛を概観するうえで良好な資料であることから、この遺跡の横櫛をみてみよう。

1 平安京右京八条二坊二町出土櫛の概要

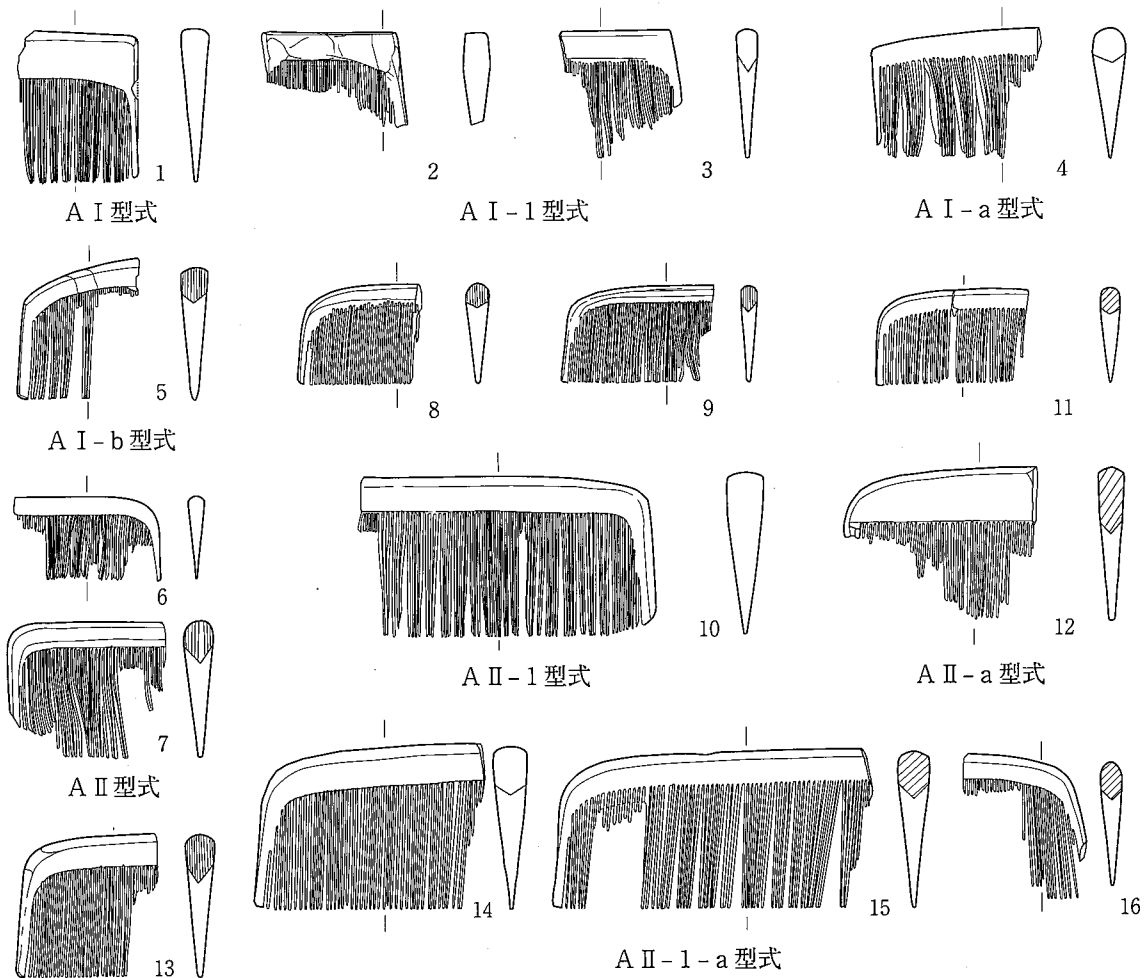


図1 平安京右京八条二坊二町出土主要横櫛 (1/2)

(1次調査：11・12・14～16 2次調査：5・7～9・13 3次調査：1～4・6・10)

この遺跡は、京都市立七条小学校敷地に該当し、同校の施設建て替えにともない、これまでに3次にわたって調査を実施している(資料3～5)。調査成果には、南北条坊路の一つである西鞍負小路の道路敷・東西側溝・四行八門制による町内を細分する遺構・建物などがあり、各遺構から多くの木製品が出土している。いずれも平安時代前期に属するが、平安京造営時の9世紀前後から9世紀後半代までの時期にわたる。横櫛の出土個体数は、1次調査で14点、2次調査で19点、3次調査で25点ある。これらの横櫛を分類すると、型式のわかる資料は、1次調査ではA II-a：3点・A II-1-a：3点、2次調査ではA I-b：1点・A II：2点・A II-1：3点・A II-1-a：1点、3次調査ではA I：2点・A I-1：3点・A I-a：1点・A II：3点・A II-1：1点があり、以下に分類する型式の大半の横櫛が出土している。

2 AI型式

『図録』で「長方形のもの」とされる横櫛のうち、肩部が角張る櫛である。藤原宮を始めとして、平安京でも一定量出土しており、この型式の櫛がほぼ連続して生産消費されたことがわかる。以下に示したように、A I・A I-1・A I-a・A I-bの4つに分類できる。

1) A I型式(参考：図2-17・18) この型式の櫛は、原背と側縁の角度はほぼ直角になる

もので、背は直線かやや膨らみを有する。肩部の形状は、藤原宮のものは概して数回の切り落としのままのものもあるのに対し、奈良時代以降のものは大半が丁寧な調整を行う。また、図2-17・18の肩部の粗い削り調整痕は、次に示す肩部に丸みを帯びたA II型式を意識した角の調整痕跡とも捉えることができるが、図2-18の肩部では一方の肩はA I型式の特徴である直角に近い形態を示していることから、A I型式と捉えておく。なお、図2-18の歯の先端の形状は背の膨らみと同じ曲線を描く。

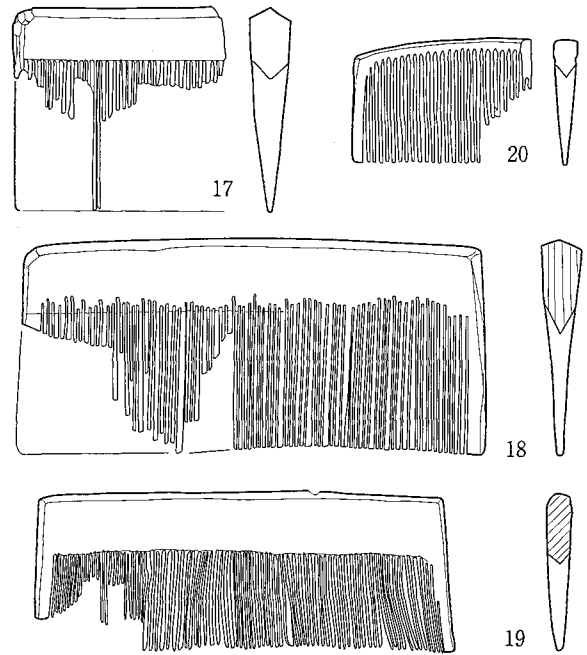


図2 A I型式横櫛 (1/2)

(各資料の図を調整・再トレース) A I型式: 17【資料6 (22)】・18:【資料7 (17)】 A I-1型式: 19【資料8】 A I-a型式: 20【資料9 (659)】

2) A I-1型式 (参考: 図2-19) 埋没時の歪みなどを考慮したとしてもなお明らかに背と側縁との内角の角度が鈍角となる傾向の横櫛があり、側縁が斜め下方へ張り出す形態のものをA I-1型式に分類した。

藤原京を始めとして平城京・長岡京・平安京 (図1-2・3など) にもみられる。

背と側縁との内角は、A I型式での平均値では90~93度程度の開き角度であるのに対し、A I-1型式の類例での平均値では95度前後の角度を有する。藤原宮出土のものはほぼ直角をなすようである。内里八町 (資料10-1) などの例ではむしろ鋭角になるものもある。図1-2・3は98度前後の開き角度を有し、A I-1型式の櫛の中でも特徴的であり、新たな形態的变化とみることもできる。

3) A I-a型式 (参考: 図2-20) A I型式のうち、背が上方に向かってやや膨らむ (肩部の角から背の頂部までの高さが5mm以上を目安とした。図2-17・18でも僅かに上方に膨らむが、3mm内外までの高さである) 傾向を持つものである。この型式の櫛は、藤原宮 (資料6-21) などや平城京・長岡京・平安京 (図1-4など) にもみられるが、類例は少ない。

4) A I-b型式 (参考: 図1-5) A I-a型式よりも背が上方に向かってさらに膨らみが増し、盛り上がる櫛である。同様の形態の背を有する類例としては、資料11-266があるが、背の膨らみは小さい。背が盛り上がる例としては、資料6-20・資料12-28・資料13-51などがあるが、側縁が欠損するため型式は不明である。5は角から背の頂部までの残存高は12mmある。

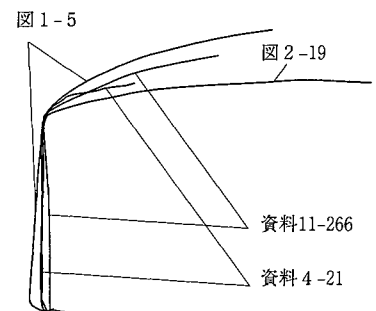


図3にA I-a・A I-b型式の外郭線の参考資料を掲載した。この図では、比較の上で図1-5を基本形に他の櫛を拡

図3 A I-a・A I-b型式外郭線

大・縮小している。この図からは、A I-a型式とA I-b型式の肩部から背への膨らみの形状が異なることがわかる。A I-a型式では、肩部からやや膨らみを持ちつつ中央に向かって平坦になるのに対し、A I-b型式では、肩部から背自体が丸みをもって盛り上がる形状を呈する。

3 A II型式

『図録』で「長方形のもの」とされる横櫛のうち、肩部に丸みをもつ型式の櫛である。藤原宮を始めとして、平安京でも一定量が出土しており、横櫛の中で奈良時代以降主流となる。以下に

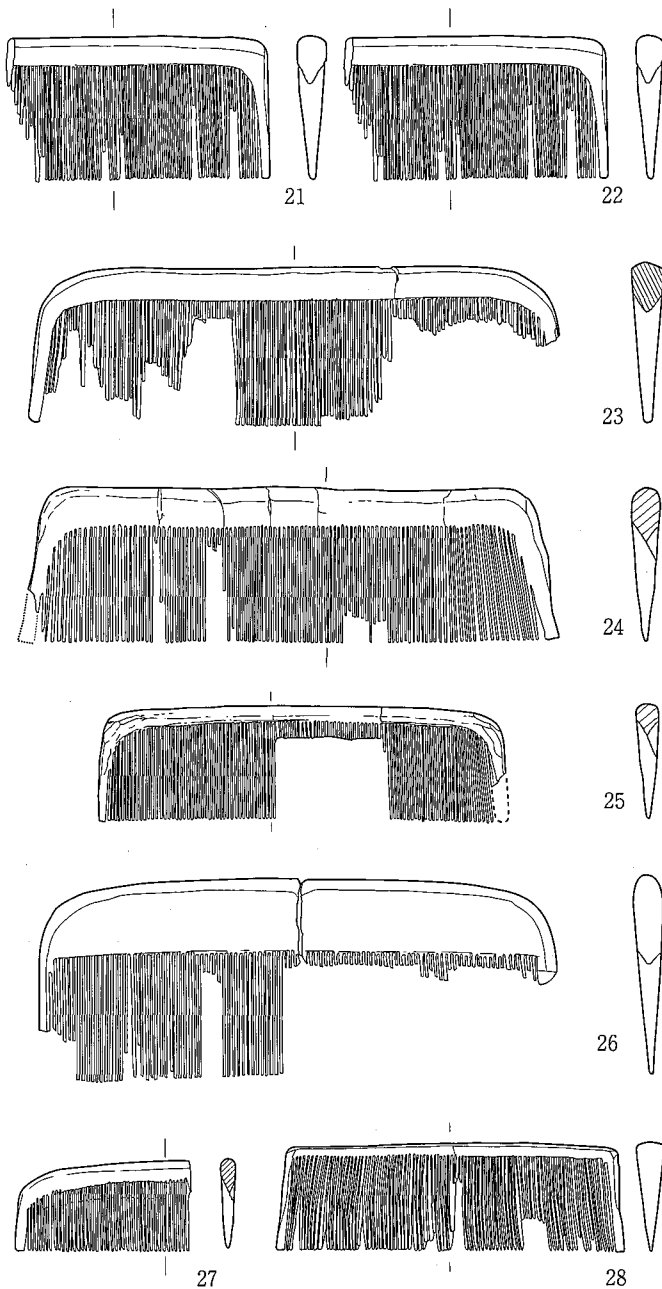


図4 A-II型式横櫛 (1/2)

(各資料の図を調整・再トレース) A II型式: 21【資料14 (2-3)】・A II-①型式: 22【資料5】 A II-1型式: 23【資料15 (1)】・24【資料16 (51)】・A II-a型式: 25【資料16 (48)】 A II-a-①型式: 26【資料17 (20)】 A II-1-a型式: 27【資料18 (37)】・28【資料19・2 (1805)】

示したように、A II・A II-1・A II-A・A II-b・A II-1-Aの5つに分類できる。

A II型式の形態を観察するために、側縁から背の頂部への丸みの変換点に着目した。櫛の背高から側縁の丸みの変換点までの高さを、側縁の丸みの変換点から背の丸みの変換点までの長さで割ると、各型式として抽出した資料の平均的な数値が表れる。この数値は背の膨らみ具合や肩部と背の形状が表れる(丸み度)。横櫛の側縁は概して直線の形態をとるため、数値が高いほど背は直線となり、肩部は小さな丸みとなる。一方、数値が低いほど背は膨らみ、肩部の丸みから背へと緩やかな曲線を呈する傾向になる。

1) A II型式 (参考: 図4-21) この型式の櫛は、原則として背と側縁の角度はほぼ直角になり、平面形は長方形を呈する。肩部は丸みを持ち、背は直線か僅かに膨らみを有する。

A II型式として抽出した資料の平均的な丸み度の数値は0.6となる。

2) A II-①型式 (参考: 図4-22) A II型式のうち歯の挽き通し線が直線の櫛である。歯の挽き通し線が直線のためやや背が高い。

3) A II-1 型式 (参考: 図 4-23・24) A I-1 型式と同様、埋没時の歪みなどを考慮したとしても明らかに背と側縁との内角の角度が鈍角となる傾向の櫛で、形態として側縁が斜め下方へ張り出す。

背と側縁との内角は、A II 型式では平均値で91度程度の開き角度であるのに対し、A II-1 型式の類例では96度前後の角度をとる。図 4-24では99度ある。A II-1 型式として抽出した資料の平均的な丸み度の数値は0.56となる。ただし、図 1-10などのように、背は直線を呈しながら肩部から背へ向かって緩やかに丸みを付けるものもあり、この場合、丸み度の数値は0.36となる。

4) A II-a 型式 (参考: 図 4-25) 背が上方に向かってやや膨らむ傾向を持つ型式の櫛で、基本形はA II 型式である。背と側縁との内角は、平均値で92度程度の開き角度である。A II-1 型式として抽出した資料の平均的な丸み度の数値は0.3となる。

5) A II-a-①型式 (参考: 図 4-26) A II-A 型式と同様に、背が上方に向かって膨らむ傾向を持つ型式の櫛のうち、歯の挽き通し線が直線の櫛である。この型式の櫛は、歯の挽き通し線が直線であることから、背は高くみえる。背と側縁との内角は90度、丸み度の数値は0.38となる。

6) A II-1-a 型式 (参考: 図 4-27・28) 背と側縁との内角の角度が鈍角となり、側縁が斜め下方へ張り出す。背は上方に向かってやや膨らむ。背と側縁との内角は、平均値で94度程度の開き角度である。A II-1-a 型式として抽出した資料の平均的な丸み度の数値は0.32となる。

4 B 型式

『図録』で「半円形のもの」とされる横櫛である。出土例は極めて少ないが、形状から b-1 型式・b-2 型式の2つに分けられる。

b-1 型式 (参考: 図 5-29・31) 『図録』でいう半円形を呈する横櫛である。底辺と側縁下端から背の頂部を結んだ角度は、31で約44度ある。

b-2 型式 (参考: 図 5-30・32) 楕円形を半截した形態を呈する。30は平安京出土の鎌倉時代に属する横櫛である。底辺と側縁下端から背の頂部を結んだ角度は、32で約34度ある。

以上、横櫛についてみてきた。次にその概要を示す。

A I 型式の形態としては、奈良時代前後のものは高さのある長方形を呈するが、奈良時代後半以降のものは、幅のある長方形となる。また、側縁が下端で外方へ張り出す形態や、背が上方へやや膨らむ形態などのあることがわかった。A I 型式は各都城で出土例があり、型式として連続するが出土例は少なく、奈良時代以降はA II 型式の櫛が主流となる傾向にある。ただし、9世紀後半の平城宮の井戸 (資料30) では、伝世品か地域的・技術的な傾向かわからないが、依然としてA I 型式類の櫛が半数程度ある。

一方、A II 型式の櫛は、丸み度をみると、A II・A II-1 型式とA II-a・A II-1-a 型式の間

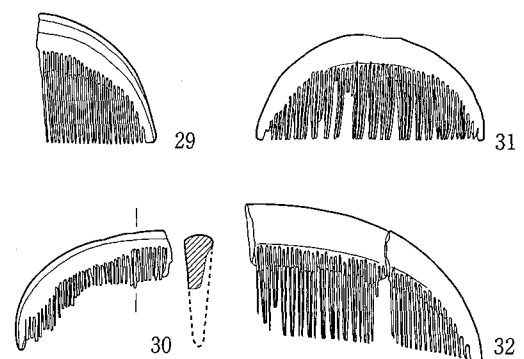


図5 B型式横櫛 (1/2)

(各資料の図・写真を調整・再トレース) 29【資料2 (1815)】・30【資料13 (49)】・31・32【資料20 (SD5200-82・SE5045-134)】

には明瞭に差異のあることがわかる。この数値はAⅡ型式の櫛のうち「AⅡ・AⅡ-1型式」の櫛の平面形がAⅠ型式と同様に長方形を呈すること、「AⅡ-a・AⅡ-1-a」型式の櫛の背が、背の中央部に向かって脹らむ傾向にあること示している。また、背と側縁との角度からは、「AⅡ-1・AⅡ-1-a」型式の側縁が下端外方へ張り出す櫛の開き角度が大きいことをしている。これらの櫛は奈良時代からみられるが、長岡京期から平安時代にかけてAⅡ-1-a型式の占める割合が増すようである。

なお、このほか、歯の間隔が非常に粗いA型式の横櫛（資料9-658・資料13-55）があるが、側縁を欠損しているため分類していない。

3. 製作工程で廃棄された櫛

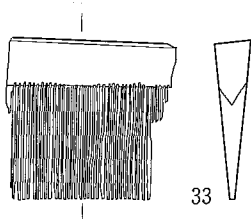


図6 平安京右京八条二坊二町出土横櫛（1/2）

ところで、左図（図6-33）のような横櫛が出土している。出土地点は平安京右京八条二坊二町で、平安京の西市の外町に南接する位置に当たる。平安京造営前後の流路（運河）から出土した。

この櫛は両端を欠損するものの、背から歯先まで遺存する資料である。現存幅4.5cm・高さ4.2cm・厚さ0.95cmあり、完形の横櫛のほぼ3分の1程度の破片と考えられる。遺存状況を観察すると、まず、歯先を水平に正置した場合、背は一方に対して約2.8度の、歯の切り通し線は一方に対して約0.9度の傾きを有する。歯の挽き出しは切り通し線に従って行われるが、鋸の切り通し線に対する誤差範囲は上下ともほぼ1mm内におさまり、比較的丁寧に歯を挽き出している。歯は3cmあたり26枚挽き出している。歯の挽き出し状況からは、櫛の基本的な製作工程はほぼ完了していたと推定できるが、断面観察からわかるように、断面の各辺はすべて直線であり、器面調整は全く行われていない。歯の挽き出し工程後の器面調整が行われていないことから、この櫛は製作途中に何らかの理由によって廃棄された未製品の櫛であると想定できるのである。

この櫛の遺存状況から櫛の製作過程が想定される。まず、長方形の材を切り出すのであるが、この過程で、型式にしたがった材の形状に整えるのであろう。次に、長辺側の一方の厚さを減じたのち、歯を挽きだす切り通し線を付け、両側から斜め方向に鋸を入れて歯を挽きだす。この時点では、器面の調整は全く行われていないので、背や歯先に丸みを付ける工程や器面全体を磨き上げる工程は、最終段階に行われたことがわかる。

また、図1-2の櫛を観察すると、この櫛の器面もケズリ痕跡が残っており、背が粗く調整されているのみであるので、最終的な器面調整は行われていないようである。

このような未製品の櫛の出土例からは、西市周辺地域での生産活動の想定が導きだされる。次に、この櫛が出土した遺跡について概観し、当該地域における地域性について見てみよう。

4. 西市周辺における遺跡と未製品の遺物

都市機能の維持に必要な施設の一つとして市が挙げられる。平安京にも七条大路の北側に東・

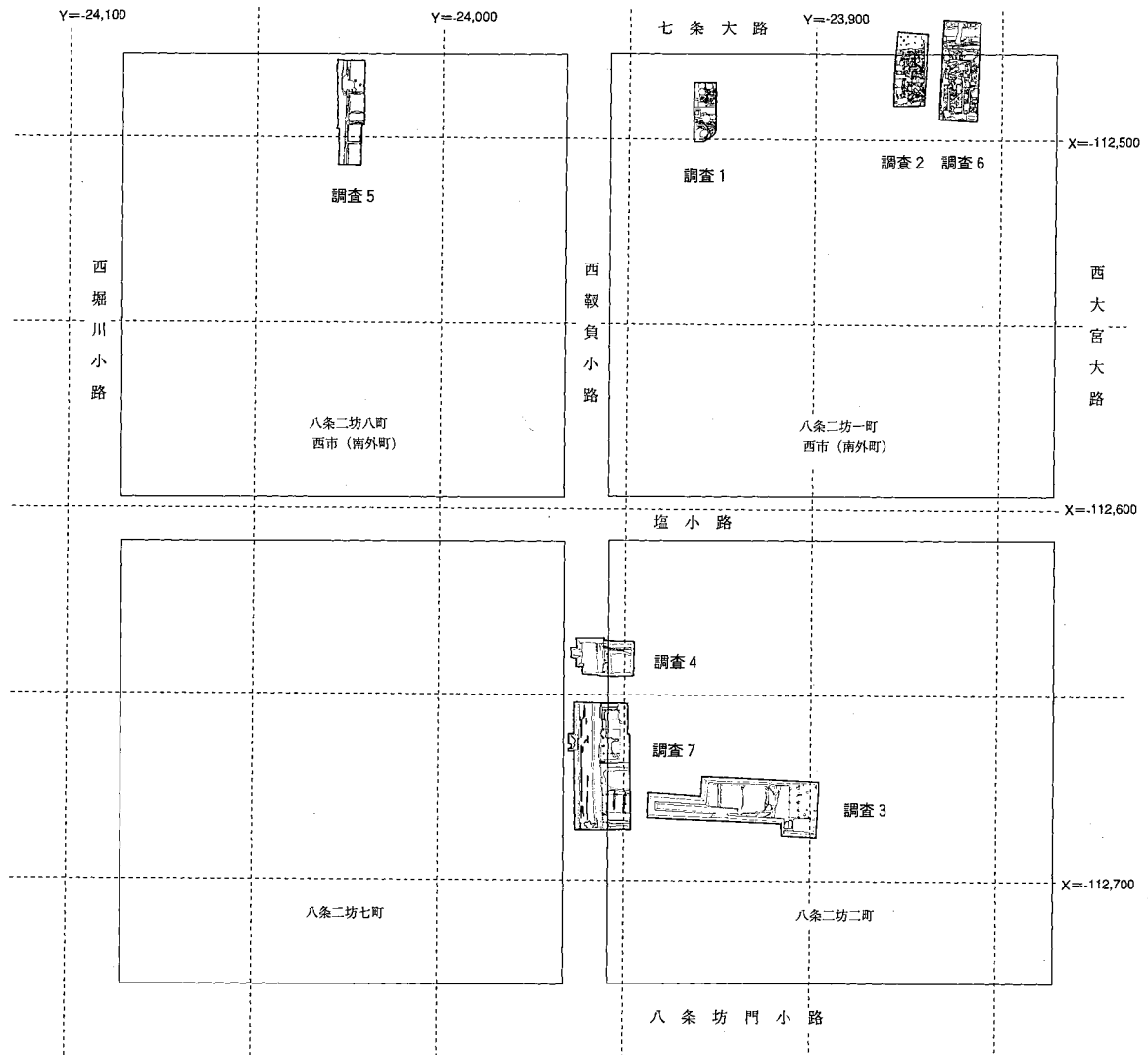


図7 平安京右京八条二坊一・二・八町の調査区配置図

西市が置かれた。市は4町を占める市町と、各辺に外町が2町ずつ付属したとされる。外町や外町周辺地域では多くの調査成果が挙がり、菅田薫氏がまとめられている(資料21)。

1 平安京右京八条二坊一・二・八町の概要

さて、図7に示した右京八条二坊北東部は、一・八町が西市の南側外町、二町は南側外町に南接する位置関係にある。一・八町は外町であるが、活用形態には著しく異なる。八町(調査5・資料22)は平安時代前期末に属する溝によって細かく区画されており、菅田氏は「想像を豊かにするならば、間口一丈八尺ほどの市麩が背中合わせに二棟、九丈二尺の東西棟建物で軒をつらねていたと想像できる」と、麩(店)の規模の実態を示す遺構として想定されているが、「溝と溝の間に多数の柱穴を検出した」が「建物のまともは見出せない」とされており、上部構造としての建物の実態は恒久的なものではなかった可能性がある。この溝によって細かく区画された範囲は、高橋康夫氏が示されているような「麩」が「物をならべて(のせて)おく場所」であり、「店舗空間」であったと理解でき、店舗の諸形態として「台・床・棚」を挙げられている(資料23)。細かく区画された空間に仮設的な建物が建ち、その中にこのような形態の店舗が形成され

ていた可能性がある。一方、一町（調査1：資料24 調査2：資料25 調査6：資料26）では、調査6で東一・二行間で南北溝を検出したのみで、細分区画はみられない。調査1では平安時代前期の井戸が検出され、図4-29の横櫛を含め横櫛が9個体出土している。

二町では、ほぼ中央部には大型の建物が建ち（調査3：資料3）。西端の西鞞負小路に沿った箇所（調査4：資料4 調査7：資料5）には四行八門制による一戸主ごとの区画が整然と敷設され、戸主ごとに建物が建つ。網伸也氏はこの遺跡から出土した木簡の分析から「市の周辺に形成された諸官司の物資保管施設の存在を推定」されている（資料27）。市外町の周辺地域は平安京造営時から活発な様相を呈していたのである。また、戸主ごとに建つ建物は2間×3間の小規模なものであるが、後の町屋のような道路にほぼ面して位置し、高橋氏は「屋敷型から町屋型へ向かう過渡的な姿」と指摘されている。市の周辺地域には諸官司の施設や京戸の居住域が混在する特徴的な姿がみられる。図6-33の未製品はまさにこのような地域から出土しているのである。

2 市の販売品目と未製品の遺物

市外町に南接する地域で櫛が生産されていたことは、先に示したが、当該地域における櫛に関連する史料を見ると、『弘仁式』では東西市の共通販売品目に「櫛」が含まれるが、『類聚国史』承和2年（835）9月条では、西市の衰退に伴って、西市の専売品が定められ、「櫛」が登録される【錦綾、土器、染物、絹冠、調布、牛、縫衣、染革、帯幡、綿、絲、紵、針、績麻、絹、油、櫛】。ところが、『類聚国史』承和7年（840）4月条には、東市司の抗議によって西市の専売品が廃止され、再度「櫛」は共通販売品目となる。さらに『續日本後紀』承和9年（840）10月条

には、再び、西市における販売物品が定められ、承和2年と同じ専売品が定められるのである。『延喜式』からは、遺跡の実態とは乖離するものの、東西市共通品に「櫛」が共通販売品目になったことが知られる。市における櫛の需要が周辺地域における手工業生産を促したのであろう。

この遺跡では、櫛以外にも未製品ではないかと考えられる木製品が出土している。一つは図8-34である。調査7の平安京造営時の流路（運河）から出土した。長方形の板材を使用し、長辺の一端を甲盛り状に整形する。他の各辺は直線的に調整される。幅4.1cm、高さ3.6cm、厚さ0.8cmある。この平面形態は、大きさは一回り大きいものの、帯飾りの丸轆を連想

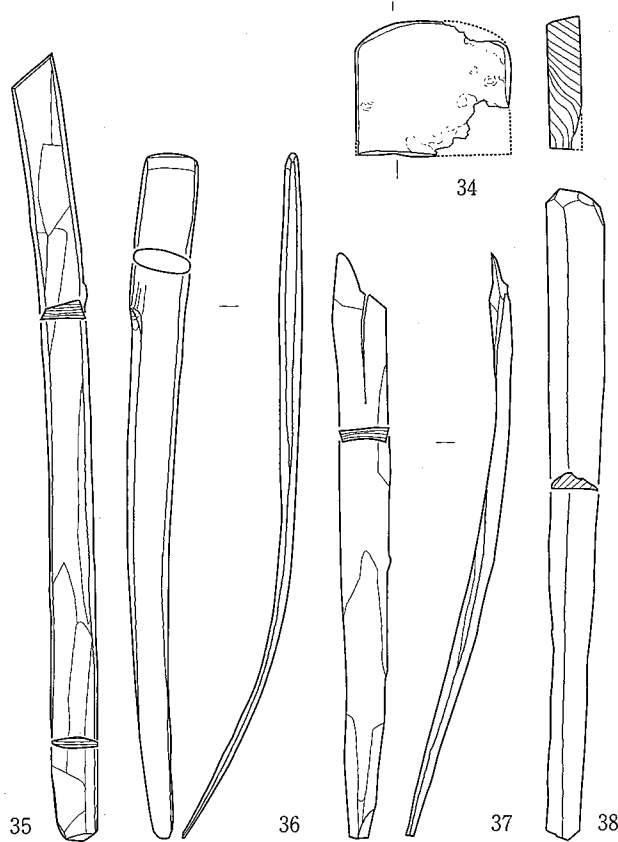


図8 平安京右京八条二坊二町出土木製品（1/2）

させる(資料28)。『倭名類聚抄』には革帯の項に革帯の総名として「櫛上」が挙げられている。この用語の由来はわからないが、甲盛り状の形状からは、横櫛のAⅡ-b型式の背のような形状が想起される。木製の革帯は、正倉院(南倉141・資料29)に類例があり、平城京にもみられる(資料19)。図8-34も木製帯飾りの例として挙げておきたい。図8-34は裏面に潜り穴は穿孔されていないので、未製品と捉えられる。このほか、図8-35~38は調査4の平安京造営時の流路(運河)から出土した、留め針と考えられる木製品であるが、37・38は下半のみケズリ調整し、上半は未調整であることから未製品と考えられる。ほかにも赤色原料が付着した曲物や板・棒など、手工業生産が行われていたことを示唆する資料が複数ある。

5. まとめ

以上、古代都城から出土した櫛についての分類を行い、その過程で見出した櫛の未製品から遺跡の性格にも触れた。

平城京から平安京にかけて櫛の基本的な型式の変化はみられなかったものの、細部に注目すると、平安京では背が脹らみつつある形態やその型式の横櫛の割合の増加がみられ、出土横櫛全体に占める比率は6割におよび、平城京では3.5割程度との傾向が得られた。櫛が、手に持ち髪を解き梳く道具であるかぎり、形態・機能を逸脱する変化は生じないが、都城別の出土例からは、背や側縁の微細な形態差に時代的な変化を読み取ることができた。反面、平安時代前期後半の平城京の事例(資料30)では、平安京とは異なりAⅠ型式の横櫛の割合が半数程度占めており、地域的な要素による傾向であるとの想定ができるのではないだろうか。

都城の移動とともに新たな市における需要が発生し、市の周辺地域で手工業生産が始動する。市の需要に供する櫛の生産が市外町を取り巻く外郭地域で行われていたことは、未製品の櫛から理解でき、平安京の手工業生産の実態の一端を垣間見ることができた。文献史料からは、9世紀中頃の西市に「櫛」を買い求めたことが理解され、その前後の時期にも、西市における櫛の需要があったことは確かである。櫛作りという手工業生産を担う者は、ある官司に属した工人であろうか、あるいは、道路に沿った建物に属する都市民であったかは想像の域を出ない。しかし、その他の未製品ないし半製品、あるいは当該地域における生産を窺わせる出土例を含め、都市機能を支える最も重要な施設の一つであり、市という都市における最も繁華な核を中心に、外町・外町外郭地域という同心円的な地域性が、生産を担う工人をこの地域に集約させたのであり、手工業生産を生み出す要素となったのであろう。

なお、平成11年度科学研究費補助金(B)を受けてこの小論をまとめることができた。

参考資料

- 1-1 辻 裕司「木製品」『平安京提要』角川書店 1995
- 1-2 辻 裕司「古代都城出土の扇具について」『研究紀要第4号』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997
- 2 『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所 1985

- 3 「右京八条二坊」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985
- 4 「右京八条二坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988
- 5 「右京八条二坊」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995
- 6 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』奈良国立文化財研究所学報37冊 奈良国立文化財研究所 1980
- 7 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報31冊 奈良国立文化財研究所 1978
- 8 『平安京跡発掘調査概報集 1978 Ⅱ』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978
- 9 『平安京右京六条一坊』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告11冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1992
- 10 「内里八丁遺跡」『京都文化博物館調査研究報告』第13集 1998 京都府文化博物館
- 11 『飛鳥京跡(二) 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第40冊 奈良県教育委員会 1970
- 12 「左京第120次」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第18集 向日市教育委員会 1986
- 13 『平安京跡発掘調査報告-左京四条一坊-』平安京調査会 1975
- 14 「平城京右京二条三坊四坪・菅原東遺跡の調査 第293次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成6年度 奈良市教育委員会 1995
- 15 「近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う調査」 資料14に同じ
- 16 「右京第529次調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成8年度長岡京市埋蔵文化財センター 1998
- 17 『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報37冊 奈良国立文化財研究所 1989
- 18 『長岡京市史 資料編一』長岡京市史編さん委員会 1992
- 19 『史料京都の歴史 第2巻 考古』平凡社 1983
- 20 『平城京左京二条二坊・三条二坊-長屋王邸・藤原麻呂邸の調査-発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報54冊 奈良国立文化財研究所 1995
- 21 菅田薫「東西市」『平安京提要』角川書店 1995
- 22 「右京八条二坊」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989
- 23 高橋康夫「町屋」『絵巻物の建築を読む』東京大学出版会 1996
- 24 『平安京西市跡-南病院中棟新築工事に伴う発掘調査の概要-』昭和53年度(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980・資料19
- 25 「右京八条二坊」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983
- 26 「右京八条二坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1990
- 27 網伸也「木簡」『平安京提要』角川書店 1995
- 28 平尾政幸「石帯」本紙掲載 木製帯飾りについては平尾政幸氏から多くの御教示を得た。
- 29 正倉院事務所編『正倉院宝物』朝日新聞社 1988
- 30 『平城宮発掘調査報告Ⅳ』奈良国立文化財研究所学報17冊 奈良国立文化財研究所 1976